

# Love Bombing Society

—匿名のアート作品の分析と考察—

富山大学芸術文化学部 デザインコース

田中 海里

## 要 旨

本稿は、歌舞伎町周辺で拾得した紙片「あなたは愛されている」と、裏面に記載された URL から発見された匿名映像《Love Bombing Society》を対象に、その配置行為と言語表現の構造を記述・分析する。映像では紙片が手渡されず、ゴミ箱付近や袋状の容器など、都市の「処理系」に近い地点へ反復的に置かれる。この手つきは、対話や贈与の往復ではなく、一方向の「投下」として理解できる。活動名に含まれる “bombing” を文字通りに読むなら、重要なのは相互性の欠如であり、爆発は物理的出来事ではなく、受け手が紙片を視認し意味として認識した瞬間に生じる。

本稿はさらに、主体不明の無条件肯定が、受け手の内部に「根拠の所在」を探す問いを残し、救いとして作用しうる一方で、他者承認への依存を生成しうる点を、言語行為論および贈与論を参照しながら整理する。

## 【序論】

本調査は、完成された作品や明確な作者像を前提にして対象を解釈するのではなく、都市空間に置かれた痕跡を起点に、観察可能な事実の記述から構造を立ち上げる試みである。ここでいう構造とは、作者の内面や意図の推定ではなく、痕跡がどのような形で提示され、どのような受け取り方を誘発しうるかという条件の組み合わせである。

都市空間には、落書き、ステッカー、紙片など、発話主体や宛先が明示されない痕跡が多数ある。これらはしばしば「誰が言ったのか」「誰に向かれているのか」が曖昧なまま流通し、受け手の側で意味が補完される。本稿が扱うのは、その中でも、通常は関係性を前提に機能するはずの肯定文が、主体不明のまま配置される事例である。

「あなたは愛されている」という文は、それ自体が攻撃的ではない。しかし、主体が示されないまま公共空間に置かれるとき、その文は慰めとして完結せず、受け手の内部に問いを残す。本稿は、紙片の拾得と映像の観察記録を基礎資料とし、(1)紙片の配置行為を「投下（爆撃）」として読む妥当性、(2)爆発が受け手の認知の側で起こるという仮説、(3)無条件肯定が救い／呪いとして両義的に作用する条件、を順に検討する。

## 第1章：調査の発端

### 1.1 路上における紙片の拾得

2025年9月26日、東京へ旅行した際、新宿・歌舞伎町周辺で「あなたは愛されている」と印字された紙片を同日に3枚拾得した。紙片はいずれもポストカードに近いサイズで、表面には同一の文言のみが印字されており、署名や団体名、説明文はない。裏面にはURLが記載されていた。



写真 1 拾得した紙片

拾得地点は以下の通りである。

- ・エスパス歌舞伎町店（周辺）
- ・歌舞伎町交番前の自動販売機の取り口
- ・路上のゴミ捨て場（袋状のごみの上）

紙片はいずれも手渡しではなく、ゴミ箱付近や汚れやすい場所、目立ちにくい位置に置かれていた。仮に誰かに見せたいのであれば、より視認性の高い場所に配置できるはずである。肯定文でありながら、その置き方が「届かせる」よりも「混ぜる」に近い点に、最初の違和感があった。

私はキリスト教の家庭で育ったため、「あなたは愛されている」という言葉に既視感があつた。救済や肯定を想起させる語彙である一方、発話主体が欠けたまま公共空間に置かれていることは、宗教的な宣教とも一般的な広告とも一致しないように感じられた。

紙片に印字されていた URL ([www.lovebombingsociety.com](http://www.lovebombingsociety.com)) ヘアクセスすると、一本の映像が表示された。画面左下には「Love Bombing Society」という文字があり、タイトルまたは団体名のように見えたが、サイトには活動説明、連絡先、理念などの情報はない。映像のみが提示されている。

### 1.2 初期の疑問と調査の動機

「Love Bombing」という語は一般に、過剰な肯定や愛情表現によって相手を操作する行為を指す。にもかかわらず映像内の行為は「愛を与える」より「置く／捨てる」に近く、語の意味と行為の見え方にズレがあるように思われた。当時生じた疑問は次の通りである。

- ・この言葉は誰に向けられているのか
- ・なぜ発話主体を示さないのか
- ・なぜ目立ちにくい場所や汚れやすい場所を選ぶのか
- ・URL を載せる以上、サイトへアクセスされることを想定しているはずだが、それが目的なのか

検索によって手掛かりを得ようとしたが、この活動に直接結びつく情報は見つからなかつた。それでも本作が気になり、映像を反復視聴し、観察できた事実と推察をノートに記録することにした。

### 1.3 映像の視聴記録

2025年10月4日、映像を再生し、タイムコードごとに行行為をメモした。映像は約6分で、紙片がさまざまな場所に置かれる様子が反復される。観察できた特徴は以下である。

- ・紙片を手渡す場面がない
- ・ゴミ箱付近、袋状容器、レシート投入口、汚物入れなど「処理」を連想させる地点が多い
- ・撮影者が周囲の人目を気にしているように見える場面がある
- ・説明や音声がなく、行為だけが前景化している



写真 2 紙片を配置している様子



写真 3 街中を映すシーン

#### 1.4 仮説（当初の推察）

映像内で目的は明示されないため、当初、次のような推察が生じた。ここでは結論づけず、調査初期に生成された見立てとして整理しておく。

- ・「あなたは愛されている」という言葉への拒絶としての行為（言葉を捨てる／外す）
- ・「捨てている」のではなく「仕込んでいる」（爆弾の設置としての比喩）
- ・歌舞伎町という場所への比喩（消費や欲望、一時的関係の密度）
- ・「愛」を社会への攻撃（爆撃）として扱う意図

ただし、いずれも作品の情報量の少なさによって増幅される側面があり、裏付けは乏しい。以後の章では、推察の正否ではなく、観察可能な構造が何を誘発しうるかに焦点を置く。

#### 1.5 繼続性の確認（2026年1月）

本作が単発なのか継続的な活動なのかは当初不明であった。2026年1月9日、SNS上で同じ紙片を複数枚手にしている人物の投稿を確認した。これにより少なくとも当該紙片の配置は継続している可能性が高いと判断した。

### 第2章：「爆撃」としての配置

#### 2.1 配布でも廃棄でもない「投下」

映像では紙片が誰かに直接渡されず、都市空間へ置かれる。置かれる場所は、ゴミ箱の周辺、袋状の容器の近く、レシート投入口、トイレの汚物入れ付近など、「読むための展示」よりも「処理の導線」を連想させる地点に偏っている。

この偏りのため、行為は単なる配布にも単なる廃棄にも見えにくい。配布であれば受け手の前に差し出されるはずであり、廃棄であれば同じ紙を反復的に用意しURLを印字する必然性が弱い。そこで本稿では、捨てる／配るの二択を避け、受け手を特定せず都市へ落とし込む手つきを「投下」と捉える。紙片は関係を開始するのではなく、都市の循環へ混ぜられる形で置かれている。

#### 2.2 “bombing”を文字通りに読む

活動名には“Love Bombing”が含まれる。ここで重要なのは“bombing”が含意する一方性である。爆撃とは、応答を必要としない投下であり、受け手の準備や同意を前提としない。本作の配置行為もまた、特定の相手に手渡されるのではなく、生活圏へ落とされる形で反復される。

紙片が置かれる地点が「設置しやすい場所」（公共のゴミ箱、人混み、個室など）に偏ることは、爆弾の設置という比喩を補強する。つまり、作品は肯定の言葉を「届ける」のではなく「仕込む」手つきとして提示しているように見える。

#### 2.3 爆発は見つけた瞬間に起きる

本作で爆発が起きるとすれば、それは物理的な出来事ではない。紙片が視認され、意味として認識された瞬間に、受け手の内部で発火が起こると考えられる。「あなたは愛されている」という文は、読んだ者の側に問い合わせを発生させる。

誰が。

なぜ。

自分が。

しかし本作は、その問い合わせに答えを与えない。答えが与えられないために、問い合わせが内部に残りうる。つまり紙片が最終的にゴミとして処理されるかどうかとは別に、見えてしまったという事実が受け手の内部で持続する可能性がある。ここに、本作の「爆発」を置くことができる。

### 第3章：無条件の肯定は救いか、呪いか

#### 3.1 主体不明の断定が残すもの

「あなたは愛されている」は断定文である。通常この種の発話は、語り手と受け手の関係の中で慰めや保証として働く。しかし紙片には語り手がない。誰が言っているのかが明示されないため、受け手は発話主体を補完せざるを得ない。

オースティンの言語行為論に照らせば、発話が効力を持つためには一定の成立条件が要る。誰がどの立場で言うのか、どのような状況で言われるのかが欠けるとき、発話は不成立となる<sup>i</sup>。本作の肯定文も、発話としては成立条件が欠けている。だが奇妙なのは、完全に無効にならない点である。語り手がないにもかかわらず、受け手は問い合わせを持ち、内部で意味が動き出してしまう。成立していないはずの発話が、受け手の補完によって部分的に作動する。

#### 3.2 救いとしての肯定、呪いとしての肯定

無条件の肯定は、救いとして作用しうる。常に愛されているという感覚は、自分の価値が保証される感覚につながる。とくに不安や孤立の局面では、「見守られている」という構造そのものが支えになりうる。

しかし肯定は、呪いにもなりうる。ここでいう呪いとは恐怖ではなく、依存の生成である。外部から保証されているという感覚に寄りかかるほど、自分の内側から生まれる自己肯定——自分が自分を愛せるか、という問題——へ焦点を戻しにくくなる。肯定の根拠が外部に置かれたままになるからである。

さらに本作は、主体を欠いたまま肯定を投下する。根拠が与えられないまま断定だけが残るため、受け手は肯定も否定も完了できない状態に置かれる。断定は一度入ると、処理が終わらず内部に留まり続ける。この「処理しきれなさ」こそが、救いと呪いが同居する条件である。

### 3.3 返礼不可能な贈与

紙片は「あなたは愛されている」という肯定を載せている以上、表面上は受け手に向けた贈り物のようにも見える。だが本作の配置は、贈与の形式を取りながら、その成立条件を意図的に欠落させている。ここで参照したいのが、マルセル・モースの贈与論である。モースは、贈与を単なる物の移動ではなく、社会関係を編成する行為として捉えた。そこには、贈る・受け取る・返すという循環が含まれ<sup>ii</sup>、贈与は関係を開始し、持続させ、時に拘束する。

結果として起こるのは、贈与の循環ではなく、返礼不能な残余である。受け手は、受け取ったとも拒否したとも言い切れない状態に置かれる。「ありがたく受け取る」ことも、「いらないと突き返す」ことも完了しない関係を成立させるはずの行為が、関係を半端な形で発生させ、処理しきれない拘束だけを残す。

ここで重要なのは、本作が善意としての贈与を素直に成立させない点である。贈与であるはずの肯定が、最初から不要物の導線に載せられていることで、「これは贈り物なのか、ゴミなのか」という問い合わせを受け手の側に発生する。この問い合わせが、贈与の循環が成立しない代わりに残る関係の未決である。

つまり本作は、贈与によって関係を結ぶのではなく、贈与の不成立によって関係の不安定さを持続させる。肯定は与えられるが、受領も返礼も終わらない。その未決の状態が、本章で述べた「救い／呪い」の両義性を支える条件になっている。

## 第4章：「Love Bombing」の宗教的外形

### 4.1 キリスト教的布教活動としての外形

本作をキリスト教の布教と断定する根拠はない。団体名、教義、共同体への導線が提示されず、紙片の配置も配布の形式から外れている。したがって本章の目的は「宗教であること」の証明ではなく、宗教的文脈が呼び込まれやすい条件を整理することにある。

「あなたは愛されている」という言い回しは日常会話でも成立するが、主体が欠けた状態で置かれると、受け手は主体を補完せざるをえない。その補完が「神」という形を取りやすいのは、キリスト教的語彙において無条件の愛が神へ帰属づけられてきたからである。ここで語られる愛は、個人的好意や評価ではなく、人間の行為や功績に先立って与えられる無条件の愛、すなわちアガペーとして理解してきた。

たとえば『ヨハネの手紙一』では、愛の主体が人間ではなく神にあることが明確に示されている。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、御子を罪の贖いの供え物としてお遣わしになりました。ここに愛があります。」

(ヨハネの手紙一 4章10節)

また、『ローマの信徒への手紙』では、人間の状態や価値判断とは無関係に、愛が先行して与えられる構造が強調されている。

「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されました。」

(ローマの信徒への手紙 5章8節)

#### 4.2 布教として成立しない点

一方で、本活動は通常のキリスト教布教が備える要素を意図的に欠落させている。一般に布教は、少なくとも「何を信じるのか」「誰が語っているのか」「どこへ接続するのか」という参考先を伴う。たとえば教会名、連絡先、聖句、祈りの言葉などである。しかし、Love Bombing Society の紙片にはそれがない。言葉は肯定のみで完結し、信仰の対象も共同体への導線も提示されない。

この欠落は、布教の中身を削ぎ落とし、形式だけを残した状態として理解できる。つまり、宗教的救済の語彙が、それを支える主体（神）と制度（教会）から切り離され、都市空間に漂う匿名の肯定として提示されている。この点で本作は、布教に見えるが布教ではない、あるいは布教の成立条件を外した布教もどきとしての緊張を帯びる。

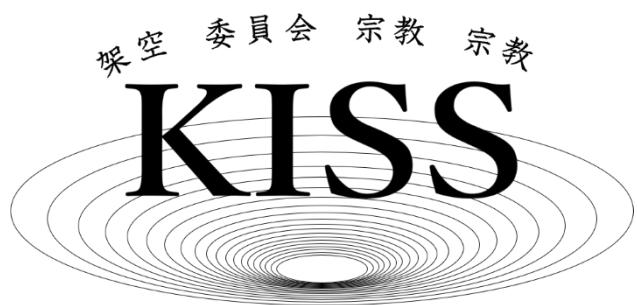
### 第5章 総括

#### 5.1 本稿の結論

本稿が確認したのは、(1)紙片が配布でも廃棄でもなく「投下」として反復されている可能性があること、(2)“bombing”は相互性の欠如を示し、本作の爆発は受け手の認知の側で生じると仮定できること、(3)主体不明の無条件な肯定は救いとして作用しうる一方で、外部からの愛への依存を生成し、処理しきれない断定として内部に残る条件を持つこと、の三点である。

#### 5.2 今後の課題

本作の動機や作者像を確定する資料は現時点では乏しい。したがって本稿は「作者の真意」を解くものではなく、痕跡が受け手の内部で作動する条件を記述するものに留まる。ただし、紙片の配置が継続している可能性が示唆された以上、今後も観察可能な資料の増加に応じて、仮説の更新が必要である。



【補遺】

本稿で扱った「Love Bombing Society」は、  
架空の宗教を実在するもののように社会へ紛れ込ませるプロジェクト  
「架空委員会宗教宗教<sup>iii</sup>」による活動の一環である。

- 
- <sup>i</sup> オースティン, J.L.『言語と行為』坂本百大 訳 大修館書店、1985年4月10日。
- <sup>ii</sup> 森山工『贈与と聖物——マルセル・モース『贈与論』とマダガスカルの社会的実践』  
東京大学出版会、2021年8月31日。
- <sup>iii</sup> KISS「架空委員会宗教宗教」  
URL : <https://kiss-info-japan.github.io/-/index.html> (最終閲覧日 : 2026年1月15日)

### 参考資料

- 黒田亘『行為と規範』勁草書房、2006年9月5日。
- 新共同訳聖書編集委員会 編『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1987年。
- 山峰潤也「アーカイブ的芸術：混沌とした時代の作法」金沢21世紀美術館  
URL : <https://www.kanazawa21.jp/tmpImages/videoFiles/file-52-7-file-6.pdf> (最終閲覧日 : 2026年1月15日)